

ああ、昔は

遠藤幸治

罪を犯しては赦され、赦されてはまた罪を犯す。罪といっても刑事的な罪でなく、神に対する罪である。自分の罪に泣きくずれる者に神が近づき抱きしめてくださった。多く愛されたことは多く赦された証拠だ。

十六代も続いた私の実家だが、私が上京した当時は十八人家族だった。が、現在は時代の波に押され、昔の面影はない。二つあった蔵も、また石垣も崩れ落ち、甥夫婦が居るといっても、働きに出て行って誰もいない、祖父母、両親、兄弟が偲ばれる。数年前に帰省したときだった。甥夫婦が仕事から帰ったときに、わたしが聖書を手にして、『放浪息子の記事』を読んだ。甥は自分の罪を悔いていた。

その晩、妻と二人で旧約聖書の『哀歌』を読んだ。涙が止まらず、眠れない夜だった。母も、そして実兄も受洗して天国に帰ったが、まだ果たすべき責任を痛感した。

あの人

松下 勝章

「哀しみに出会う度、あの人を想い出す」そんな流行歌があった。

あの人。幼少の頃、ご近所に住んでいた認知症の老婆。いつも、じつと路傍に座り込んで草を筆っていた。人生はこれから……という三つ四つの坊やだった私は、怪訝に彼女を見つめていた。

あの人。異教に支配されていた小学生の頃、同級生だったYくん。障害を負っていた。彼を異教の集會に誘っていたのは私。なんてことをしていたのだろうと悔いる。

あの人。悲運の父。灰皿を枕元に置いて、いつも寝煙草をしていた。やることなすことすべて裏目にでる毎日。そういえば、父が倒れた日、どこからともなく、この流行歌の声の主の歌声が流れていた。そして、そんな歯痒く憐れな父の上に自分が乗っかっていた。

あの人。血を流し、生贄とられた我が君イエス。すべての哀れを取り除かれた方。我が罪も、恥も、懼れも、病も、そして死も。

哀れといえは哀れ

山本披露武

学生時代の話をしている、

「あの頃は金に困って、よう質屋にいきました」と、わたしが言うと、

「そうやった、そうやった」と、義兄も言う。そして、

「ぼくが南溟寮(某国立大学学生寮)におった時は、コンパの度に質屋に走って、朝になつたら六人の寮生でズボンが二本。ジャンケンに負けたもんは教室にもバイトにもいけんと言うて、大騒ぎをしようた。けんど、上には上がおって、布団まで質屋に入れてしまい、むしろをかぶって寝とったという豪傑もおった」と言つて笑うのだ。

哀れといえは哀れ、愉快といえは何とも愉快な話である。

が、そのようにして鍛えられたお陰(？)で今の自分たちがあるのだと思うと、貧乏生活にも感謝をせずにはいられない。

聖書を読んでいて、『わたしは貧に処する道を知っており、富における道も知っている』というパウロの言葉に出会う度に、義兄と話した時のことを思い出すのである。

あわれみと感謝

浅見 鶴蔵

『自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。

それを告白して、それを捨てる者は、哀れみを受ける』(箴言二八章13節)

思いもよらない東日本大震災が、三月十一日に起こり、日本全体が大混乱になった。世界的には原子力発電の問題があり、大変な事態になった。その対応も問題視されている。

私たちの心を神に向けていく時、点検のゲージは神ご自身であると思う。

自分自身も五十年前、オイルショック、円高などで、大きな倒産に遭い、辛苦を味わった。日曜日の礼拝にも出席できず、心が痛んだ。

その時、「どこにいても、十時半の礼拝の時間を忘れないで祈ってくださいね。礼拝の報告の時、皆で祈りますから」と、愛と優しさの言葉を牧師からいただいた。

『主は隠れた所で見ておられる。あなたの父が、あなたに報いてくださいます』

いってらっしゃい

加藤 透子

礼拝の招詞の聖書箇所は司会者が選ぶことができる。夫は、礼拝の司会で、詩編三十九編第四節を選んだことがある。そこには、「主よ。お知らせください。私の終わり、私の齢がどれだけなのか」と記されている。

以前、『犬と私の十年の約束』という映画を観た。将来を暗示しているようで涙が溢れた。

昨年、私は、生まれて初めて「喪主」というものを経験した。

あの日の朝、私も小鳥も「いってらっしゃい」と言って夫を送り出すことができた。それが夫と交わした最後の言葉となった。そしてそのまま天へと旅立って行った。半世紀の地上の生涯であった。

『主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな』（ヨブ記一章21節）なのだな
……。

『祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ』（伝道の書七章2節）

贈り物

志田 雅美

私の母はとても厳しい人だった。なんでも一番になりなさい。そう言って、背負いきれないほどの課題を私に押し付けてきた。学校の宿題に加え、自主勉強。さらに、たくさんの習い事をさせられ、子供時代の思い出といったら、奴隷のように足枷をされ、鞭打たれ、必死に頑張っていた哀しい記憶しかない。この支配から逃れたい。早く大人になりたい。いつもそう思っていた。

だが、そんな母でも病気の時だけは優しくかった。熱にうなされながらも、布団の中で食べさせてもらったプリンの味が今でも忘れられない。唯一、愛されていると感じられる幸せなひと時だった。その幸せが欲しくて、何度仮病を使っただろう。

時を経て今、私は重い病気を背負う身となった。正直、不安もある。だが、そのおかげで守られ、愛される喜びを知ったのも事実だ。哀しみは益とされた。きっと、これは神さまからの愛の贈り物だと思う。

思いのままに

林 文彦

若き日に、名前も顔も知らないある女性とお見合いをした。ただどちらもクリスチヤンであることのみ知っていた。親の病気のため二十八歳ぐらいで結婚しようと思っていたので、親孝行のつもりでの見合いだった。仲人が知人だったので、よろしくと話が進んでいった。

その人には二人の妹がいたが、長女から順に嫁入りさせようと先方の親は考えていた。長女はまじめいっぽうで、次女は喜怒哀楽に富んだ何事も素直に明るく人生を楽しくしていくような人に見えた。私は次女がいいと思った。仲人は二人が他人ならよいが姉妹ではどうしようもないと言った。

私たちは駆け落ちをすることにした。ところがその手紙を書いているところを父親に見つかってしまった。計画は無残にもご破算となった。

大変悲しかったがどうしようもなく、あきらめざるを得なかった。祈りが足りなかったのか、それともこれでよかったのかと思う。悲恋物語の一つである。

哀しみを越えて

北川 静江

このたびの東日本大震災で多くの方々が最大の悲哀を経験された。特に肉親と死別した悲しみほど大きなものはない。幸い私の親戚や知人には被災された方はいなかった。

私にとつての一番大きな悲しみは幼い時に母が急死したこと、そして三十歳の弟の突然死だった。知らされた時は目耳を疑った。実家に駆けつけ、変わり果てた弟の姿に、号泣した。聞けば山道で事故、車で谷底へ転落、十二月のどか雪に埋もれて三日経って発見されたとか。人はいつ死ぬか分らない。

「天国とは涙することがなく、死もなく悲しみも叫びも、痛みも無い所」と書かれたトラクトを読んで、キリスト教会へ導かれ、洗礼を決心した。弟の死は悲しかったが、それがきっかけで家族全員クリスチャンとなることができた。

東日本大震災で被災された方々、家族を失った悲しみから、永遠の命に至らせてくださる神様に希望を託して欲しい。

神のあわれみによって

荒井 文

イエス・キリストを信じる者は、だれでも神様の愛とあわれみによって救われ、新しく造り変えられるのです。

私も以前は神様を知らず、信じられなかった罪人でした。しかし、この私のために、神はひとり子イエス・キリストをこの世に送ってください、私の罪の贖いのために十字架に死んでくださいました。イエス様が生まれた日がクリスマスです。このことを知らないではこの日を喜べません。

私は今から五十余年前に、イエス様が復活した日イースターに洗礼を受け、神の愛とあわれみによって神を信じる者になりました。

以来今日まで、日々新しくされ、復活のいのちをいただいて生かされ続けています。主のよくしてくださいましたことを何一つ忘れるな／主はあなたのすべての咎をゆるし／あなたのすべての病をいやし／あなたのいのちを穴から贖い／あなたに恵みとあわれみの冠をかぶらせる。(詩篇一〇三篇2—4節)
私にとって大切なみことばの一つです。

神の為せる業

富岡国広

毎日が退屈で、仕事をしても辛いだけ。砂を噛むような日々連続でしかない。若い時、私はこうして人生に躓いた。その大半は身勝手であった。

加えて内向的な性格と、世に馴染めない生まれつきの人間嫌いも手伝って、ますます内向きの生き方になってしまった。

ある日、こんなことをしていたら身を滅ぼすだけだと悟り、金を貯めて一人旅を決行し、一時的にそれで身を保てた。しかしウツ病を抱える私は三十代に入って大きな試練に立たされ教会の門を叩いた。曲折した後、漸く主を心に迎え入れ、恵みによって肉体から霊によって生きる方向転換ができた。

死を越えた大いなる光明をそこに見た。かつての退屈で辛い、砂を噛むような日々が、いまや楽しみに変えられた。これこそ「時になんて美しい」神の御業であった。

『信仰は望んでいる事柄を確信し、見えない。事実を確認することです』

（へブル十一章1節）

虐待の連鎖

土筆 文香

今日も虐待のニュースが流れている。年間の児童虐待相談件数は四万件を超えた。作家の柳美里さんは子どもを八時間たたき続けたが、それが虐待であると人に指摘されるまで気づかなかったそうだ。気づいてもやめられないので、カウンセリングを受けた。

柳美里さんは幼少期に両親から虐待を受けていた。父親も幼少期に虐待を受けていたことを知る。虐待は世代連鎖するのだろうか。

わたしは彼女を責められない。長男が小学生の時、丈夫になってほしいと願ってスイミング教室に入れた。だが、本人は苦痛だったようで、さぼってばかりいた。わたしは腹をたて、具合が悪い日に無理やり行かせたことがあった。それは虐待ではなかったのか……。

虐待は、親自身の心の傷の顕れである。わたしは神の愛を知り、心の傷をキリストに触れていただいて少しずつ癒されていった。

親自身が神様に愛されていることを知ったとき、虐待の連鎖はストップすると思う。

悔いること

駒田 隆

カトリシズムの影響が濃いとされる中原中也の詩に、「老いたる者をして」、というのがあります。その第一連に、「老いたる者をして静謐の裡にあらしめよ／そは彼等こころゆくまで悔いんためなり」、とあります。

老いを迎えると、今までの人生を振り返ることが多くなり、過去を悔いて、悲しみの中に溺れてしまうのです。現実からの逃避とでも言うのでしょうか、それとも、詩人の言う魂の休息でしょうか。

わたしもまた、悔いることが多くなりました。確かに、今までの人生には、楽しみもあつたはずですが、つい、哀しみを考えてしまうのです。特に、大きな哀しみを味わつたあとなど、あの時、こうしておけば、ああしておけば、と悔いて自分を慰めません。

そんな時に、主は、新たな道を示されました。それは、悲しみを文字にして、主に向かつて歌うことでした。哀しみを、わたしの、さらなる明日への出発点とされたのです。

再会しかない

三浦喜代子

続けざまに二人の大切な方々が天に帰ってしまった。まるで相談したかのように思えた。

お一人は、私の生涯の大恩師M先生、もうおひと方は私と同様に先生の生徒であったH兄である。出会いは熟年になって通い出した聖書学院。五十代の初めであった。

おそろおそろ書き出した聖書の女性エステルを、先生は新鮮だと評価してくださった。その一言で、俄然書く意欲が燃え上がった。思えば、師は育て上手な方であったのだ。

H兄は、目を細めて作品を喜んでくださった。おかげでペンに弾みがついた。思えばH兄は寛容の人だったのだ。

お二人とも申し合わせたように壮絶なガン戦争に倒れた。その間、刻一刻と状況を知らされて、息詰まる思いをした。覚悟など出来ようがなかった。

喪失の悲哀はどんなにしてもいまだに修復の手立てがない。御国での再会しかない。と一人うなだれては、うなずいている。

主与え、取りたもう

槇 尚子

家族が与えられることは幸せなことだ。

母親になった時、子供に夢中だった。初めての食事、初めての言葉、育児日記のどのページも細かいエピソードで埋められた。新しい言葉が増えるたびに、私は一言ももらさず記録したものだ。女の子二人と新米母親は時代の波にも流されることなく、平穩に過ごした。

やがて、思春期。さすがに仲良し親子はそれぞれに自分の道を歩むようになった。大人になるとは秘密を持つことだと分からなかった私は、いつまでも子どもを自分の手中に収めておこうとした。娘たちの冷めた目にたじろぎながら、私は懸命に後を追った。

遠くにいる娘たちと交わるのは時たまのメールや電話だけである。これでよかった、大人の関係になった、と今は思っている。神様は子育ての喜びと子別れの悲しみを与えてくださった。そして今の穏やかな親子関係。主の御名はほむべきかな。

東日本大震災が二〇一一年三月十一日に発生、未曾有の大災害に誰もが心の芯から驚愕した。翌日から被災者のために妻と共に祈りを開始。節電と節約に励むことにしてまずは居間の空調を止めた。

大震災の日から四日後の三月十五日その日は朝からとても寒かった。北向き四畳半の私の仕事部屋は冷え込んでいたのでツイ空調のスイッチを入れた。

昼時になって妻が仕事部屋へやって来て空調が「強」で稼働しているのに気付いた。食卓に二人が向かい合って座った時、悲しい目つきになった妻の口から「あなたはこんな大変な時に、たった自分ひとりのためになぜガンガン暖房を入れるのですか。あなたは真剣に被災者のことを思っているのですか。それでもキリスト者なのですか。あなたに恥ずかしくないのですか。」妻は本気で泣いていた。

心からの悔い改めとゆるしを請うて神に祈り、妻に感謝した。私の目からも涙が流れた。

トッポ・ジージョのボタン戦争

山本 千晶

「トッポ・ジージョのボタン戦争」十歳の時に観た映画。互いの利害関係から核爆弾の発射スイッチを押しそうとする世界各国の首相。人間に立ち向かい世界の平和を守り抜く、主人公のネズミと、その友達の赤い風船。

小さなネズミと、フワフワと、か弱い風船が果敢に体当たり。そして見事、核戦争を阻止する。ハッピーエンドであるにも関わらず、観終わった私は大声で泣き始めてしまった。

ネズミ達の働きのおかげで自分達の世界が助かったことを人間は誰一人知ることがない。それどころか、大活躍した友達の風船が目にも留められず人に踏まれて破れてしまう。

「トッポ・ジージョがかわいそう」無性に悔しく人間の身勝手さに気持ちが悪くならないままに過ごしてる人間の姿。まさに今の私ではないか。

四十年も経った今、ようやくネズミ達の姿にイエスさまが重なって見えてきた。

作家、遠藤周作のエッセーの中に忘れがたい一こまがあった。やや不良がかった少年だった彼の登下校時に付かず離れずついて来る「クロ」という名の犬が居た。

彼が立ち止まり、「お前、何でついてくるんだ？」と睨むと、クロはじつと彼の顔を見上げて「いけませんか？」と問うているかのようだった。

当時の彼は、離婚した母と共に暮らしていた。学校から帰宅後、狂ったようにヴァイオリンを弾く母、ロザリオをまさぐりながら、鬱々として動かない母の姿を見ると、そつと外に出ずにはいられなかったようだ。その彼にクロは何処からともなく現れて、「どうしました？」と言っているようだった。「煩いよ！」と邪険に言うと、クロは優しい哀しい目で彼をみつめた。

私もいつか、どこかで、あのまなざしに出会ったと思った。

それが血を流されて祈られたイエス様との、約束を守れなかった弟子たちへのまなざしに似ていると気づいた時、思わず震えた。

息子が泣いた日

土屋 理絵

息子が小学校に入学した春、学校のプールでヤゴを取って帰ってきた。昆虫は苦手なはずが、やはり自分で捕まえたからだろうか。海老によく似ているからと「エビ吉」と名前をつけ、自分でまめに世話をしていた。

数日後「エビ吉！エビ吉！」と呼ぶ息子の声がいつもと違うと思ひ近寄ってみると水槽の中のエビ吉は動かぬ姿となっていた。

「エビ吉が死んじゃったあ」彼の目からみるみる涙が溢れ、「悲しいよお」としゃくりあげる。号泣だ。見たことのない息子の姿に私まで悲しくなってしまうた。「可愛がって育てたんだからしかたないよ。お墓に埋めてあげようね」と慰め、一緒に庭の片隅に埋めた。

長い人生の中で、息子がこれから涙を流すことはたくさんあるだろう。でも幼き日に、一匹のヤゴの死をこんなに悲しんだ優しい心を与えてくれたことを神様に感謝し、大人になってもずっと持ち続けてほしいと祈った。

有終の歌

島本 耀子

一年生から三年の学童疎開の時まで、ずっと一緒だったK先生は歌が大好きだった。一昨年は度々夕方に電話があり、大声で何度も「おいで」と言う。前年にご主人が亡くなり、高台の広い家に一人住み、夕方は家中の雨戸を閉めて回る。電話器は居間から遠く、私からの電話は聞こえていなかったようだ。

訪ねると不審顔だったが、やがて「耀子ちゃん」と、抱きついてきた。先生の早い夕食用弁当が届くまで、二人は「星の界」「埴生の宿」など、懐かしい歌を歌い続けた。

「帰り道は分かる?」。 「大丈夫よ」。 「今度は大きな文字の歌集を持ってきて」。 初秋の風の中、不自由な足で見送りながらの会話である。

翌日のお礼の電話が最後だった。二十日後に85歳の先生は亡くなっていた。歌集の用意が出来たとの手紙に、訃報が返ってきたのだ。

「星の界」は途中から讚美歌の歌詞で歌ったが、先生も祈りに応えてと歌っていた。先生の最後の歌は讚美歌だったかもしれない。

優しい心

長谷川和子

「カズママごめんなさい。K子が踏み台を片付けなかったから、バカバカ」と五歳の孫は自分の頭を叩いている。

痛がる私の姿を見て、「カズママが可哀そう」と流れる涙を手の甲で拭っている十歳の孫息子。突然の出来事に動揺しつつ、私への優しい気持と責任を感じている姿が哀れに思え、遠のく意識の中で、「大丈夫、大丈夫、大丈夫だからね」と孫の方に手をかざし、振り絞って言う。

娘は第三子の臨月。少しでも役立ちたいと昼食の用意に来ていた私は、手伝ってくれたK子専用の踏み台（使用後はいつも本人が片付けていた）に気付かず、両手に麦茶が入ったコップを持ったまま転倒。前歯一本と右肩と上腕を複雑骨折した。十日後に手術をし入院一ヶ月半、厳しいリハビリは退院八ヶ月たった今も続いている。道路を歩く時「どっちの手だけ」と聞いてから痛くない方の手を繋ぐ。幼いながら今だ気遣う。この優しい気持が育まれて成長して欲しいと願うのである。

赦しを知ること

亀井 正之

私は、妻に言っていた。「キリストを信じる者は、救われるのだ」と。しかし妻は、「ああ、そう言えば、赦されるのですか」と返す。

私は、また創世記のはじめから話し始めた。私は、もう何回目かの話をしていた。もう行き詰まりに来ていた。その時、私の心に何かが起こった。私はこのことを信じているはずだった。イエス・キリストが、私のために十字架上で死に渡された。そしてそのことを信じる私たちの罪が赦されたことを。

しかし私はこのことをほんとうに知っていただろうか。神がなされたことを。神は、独り子のイエス・キリストを罪ある私たちの身代わりとしてくださった。私の声が今までと違ってきたのを感じたのだろうか。妻は少し心配そうな声で「どうかしたの」と言った。

ああ、神はこのように私の罪を赦してくださいました。もうすでにそのことはイエス・キリストが十字架につけられた時からなされていたのだ。何ということだ。それを知らずにいたとは。

哀愁

青葉亜樹子

愛犬との春の散歩道、隅田川に掛かる言問橋のまん中で足を止め川を眺めていました。満開の桜の花は風に吹かれて、やわらかい花吹雪になって川面にゆれていました。

三年前に伯父が召されました。腎不全と肝硬変でした。私は目を反らすことなく最後を見送り、別れを告げました。私をとっても大切にしてくれた伯父でした。

満開の桜と川を眺めながら、もし私がこの世を去っても、桜は何事もなかった様に秋には葉を落とすし、冬には丸裸になり、春にはまた花を咲かせるでしょう。川も流れを止める事はなく、流れ続けでしょう。

とてもあたりまえの事なのですが、そのあたりまえの移り変わりに静かな哀愁が漂っているのを感じました。

神様の摂理も永遠に流れを止めることはないでしょう。しかし私はその愛の摂理の中に生かされているのです。春の風に撫でられながら賛美を口ずさみ、犬と歩き続けました。

母の津軽三味線

有賀 麗子

幼い頃から三味線と踊りを習っていた母は公務員の父と結婚する時に、その両方を捨てて嫁いだ。五十歳頃から知り合いに教えるようになり、私も二十歳の時に習ったことがある。子守唄と小唄を一曲仕上げ、三曲目になった頃、思うように撥を使えない苛立ちを母にぶつけ、止めてしまった。

結婚して二十年ほど過ぎた頃、三味線教室の演奏会に行った。津軽三味線の音色を聞いたとき、たまっていた悲しみが堰を切つて溢れ、涙が止まらなかった。

このことがきっかけで、隣りの街に住む、母と同じ年輩の女性の先生に教えてもらうことになった。

稽古の度に先生の前に正座し、三味線の響きに包まれているうちに、かつての母への反抗心もわだかまりも流れ去っていった。

今年九十歳の母は七年前に脑梗塞で倒れ、不自由な体になった。もういっしょに三味線で舞台に立つのは叶わぬ夢となつてしまった。